

氏名	小 ^オ 山 ^{ヤマ} 文 ^{アヤ} 加 ^カ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第200号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉日本社会におけるプロフェッショナル・オーケストラの形成過程
論文等審査委員	
（総合主査）	東京芸術大学 教授（音楽学部） 枝川明敬
（副査）	〃 〃（〃） 畑瞬一郎
（〃）	〃 〃（〃） 西岡龍彦
（〃）	〃 特別招聘教授 遠山文吉

（論文内容の要旨）

現在、社団法人日本オーケストラ連盟に正会員として加盟しているオーケストラは、年間120回以上の公演や、教育普及活動等を実施するプロフェッショナルの芸術団体として、わが国における芸術文化活動の重要な一領域を担っている。これらのオーケストラの特徴は、活動規模の大きさと、それを維持、運営するための楽員および事務局スタッフの雇用体制が整備されていることにある。運営には固定費としての人件費の割合が大きく、根本的な難しさを伴うが、近年の社会構造の変化によっていっそう厳しい経営状況に置かれているオーケストラも少なくない。

従来、文化経済学やアーツ・マネジメントの分野においては、オーケストラのマネジメントでの課題およびその解決、芸術支援について、種々の研究が行われてきた。1960年代以降、聴衆の減少や地方自治体からの補助金削減等の課題に直面し、オーケストラ内部で運営に対する問題意識が高まったことを背景に、とりわけプロデューサーや事務局長といった実務経験者による研究は、大きな貢献を果たしている。現場に従事していた人々が、経営改善に向けた課題を重視するのは自然な流れであったと推測されるが、その後もオーケストラに関する研究ではマーケティングやファンドレイジングに議論が集中し、過去のオーケストラの経営をいくぶん反省的にとらえる視点に対して批判的検討がほとんどなされてこなかった。

本論文の目的は、オーケストラの従来の演奏活動や実績について、客観的、実証的に把握することで、歴史的な観点から日本のオーケストラによる演奏活動の変遷と、オーケストラという組織の形成過程を明らかにし、従来反省的にとらえられてきた日本のオーケストラ史に再検討を加えることである。本論文においてはプロフェッショナル・オーケストラを、弦楽器、金管楽器、木管楽器および打楽器の各パートを編成する演奏家とステージマネージャーなどの専門的なスタッフ、ならびに事務局員から構成され、各部門による諸活動の有機的な結合によって、西洋芸術音楽のプログラムを中心とする継続的な公演活動を可能にする組織ととらえる。研究対象としては、社団法人日本オーケストラ連盟に正会員として加盟しているオーケストラに設定し、それらのオーケストラが創立以来1990年代にかけて開催してきた定期演奏会のプログラムの分析を行った。

本論文は、第1章でオーケストラの現状について論じ、第2章から第4章にかけて、大正期から1980年代までの期間のオーケストラの活動を定期演奏会のプログラム分析に基づき考察して、終章においてそれらを総括する構成となっている。第1章では日本のプロ・オーケストラの現状を事業および運営面からとらえ、オーケストラによる演奏活動を、サービスの一環としての「プロダクト」としてとられる理論的枠組みを提示した。第2章では、わが国における常設のプロ・オーケストラ誕生の契機をもたら

したといわれる「日露交歓交響管弦楽演奏会」の実態と同演奏会が果たした役割について考察し、日本のプロ・オーケストラがどのような社会的環境の中で生まれたかを把握した。第3章および第4章では、オーケストラの活動を終戦後から1950年代までの期間と1960年代、1970年代および1980年代という時代区分に分けて取り上げ、定期演奏会の活動状況と各時代における社会的環境とを関連付けて考察した。

終章では、第4章までに述べた定期演奏会の変遷を統括し、わが国におけるプロ・オーケストラの組織基盤の確立および活動面での充実が図られる過程について論じるとともに、従来のオーケストラ史に再検討を加え、以下の4つの点を指摘した。第一に、日本のオーケストラは、それを運営面で支える社会的制度や鑑賞者が不在の状況下で誕生したが、音楽家が主導して社会に存在意義を投げかけていった側面は積極的に評価できるものと考えられる。第二に日本のオーケストラは、戦前からのキャリアの蓄積のあるNHK交響楽団を軸として、組織間の相互作用の中からプロ・オーケストラとしての確立と個性の創出を目指して発展してきた。第三に、オーケストラが安定的かつ継続的に活動するための基盤整備には時間を含む一定の資源の投入が必要であり、1970年代まで多くのオーケストラはその点において基盤確立期にあった。最後に、プロ・オーケストラは1970年代末から1980年代にかけて文化政策などの影響から、運営面および活動面においてプロフェッショナルとして一定の水準を形成した。しかし演奏会のプログラムにおける特定の作品への集中が進み、組織間の差別化が困難となり、そのことが結果的に今日の経営をいっそう困難にする要因のひとつになっていると結論付けた。このことは、オーケストラが顧客志向を強めれば特定の作品への偏重がさらに進み、創造的な芸術活動の展開が難しくなる可能性を示唆するものであると考えられる。

(総合審査結果の要旨)

申請者の小山君は、我が国におけるプロフェッショナル・オーケストラ（以下、単にオケという）の組織変遷の過程の分析と歴史的視座をもつことによって、いわば根源的な課題を明確にすることこそが、手詰まり感のある現状のマネジメントに関する諸問題の解決に大きな意義があるという発想のもと、日本におけるオケの形成過程を丁寧分析している。1925年に歴史的視点からオケ創設のきっかけを作ったといわれる山田耕筰らが展開した「日露交歓交響管弦楽演奏会」の実態把握と社会的意味をつかみ、1926年から2000年までの定期公演会の演目を統計的分析から、戦前と戦後では日本社会の変化とともに聴衆の好みが変わることを検討することにより、オケという組織に内在する課題を抽出するための試みがなされている。

散逸しかけている資料を精力的に収集し、また、当事者たちへのインタビューも含め、コンサートが終わるとともにただ雲散霧消してしまいがちな日本のオーケストラの過去の活動の実態を丹念に描き出したことには大きな意味がある。一方において、研究方策に関しても、氏の問題意識をより明確に提示するに足る枠組が構築が不足がちであったことやオケの人材育成に大きい働きをしている音楽大学との関連が十分でなかったこと等、今後の課題とする面もあった。その反面、組織論に立って内的要因（演目の偏り、専属指揮者との関係、経済基盤、日程の過密化）と外的要因（聴衆の多様化、オケの競争激化、民放からの依頼の減少、音楽卒業生等の就職難）を分けて分析し、それと対応する文化政策について言及したことは実証的な研究として妥当だろう。

今後、マネジメント研究の分野において経済主体としてオーケストラを考察するにあたって、その歴史的考察が重要であることを説得力をもって示すことに成功しており、また、その重要な第一歩として労を厭わず丁寧な歴史記述を行ったことは評価に値する。日本のオーケストラ研究において重要な寄与をなす労作として、集めた資料が今後同種の研究に大いに生かされるであろうこと、実証的な提言等から、小山君の論文を博士論文として十分な域に達しているものとして表記の評価をする。